病　　理　　部

中谷　行雄

設立までの経緯と設立後の歩み

千葉大学医学部附属病院に現在の病理部が設置されたのは1995年（平成７年）である。国立大学附属病院の病理部標榜は，平成に入り現在の文部科学省が推奨し予算化した経緯があるが，本院での病理部発足は全国でも最後のほうであった。

病理部の前身は中央検査部内の病理室に始まる。最初の教官は第二病理学教室出身の岡田正明助手であった。専任病理医がいた期間は病理室が設置された1967年から1974年までの７年間で，その後は病理部が設置される1995年まで専任病理医は不在で，主として第一病理学教室・第二病理学教室・肺癌研究施設病理研究部の教員が病院の生検・外科手術検体の病理組織診断を行った。岡林篤・井出源四郎・林豊・近藤洋一郎・三方一澤・大和田英美・張ヶ谷健一・小形岳三郎・岩崎勇・長尾孝一・中村宣生・堀江弘・中野雅行・松嵜理・菅野勇・君塚五郎・秋草文四郎・廣島健三・近藤福雄・田丸淳一・窪沢仁・高野浩昌・豊崎哲也・渋谷潔・芳賀由紀子らである（敬称，職名略）。

1995年に設置された病理部の初代部長は近藤洋一郎で，以後1996年から2000年３月まで部長は中野雅行が務めた。その後，2004年３月まで部長を石倉浩，副部長を尾崎大介・二階堂孝，以後2010年３月現在まで部長を中谷行雄，副部長を谷澤徹・堀内文男が務めた。2010年10月より，谷澤の後任として太田聡が着任した。主として病理部が設置されて以後，病理組織診断に従事した上記以外の病理学教室員は石井源一郎・岸宏久・川名秀忠・東守洋・豊田亮彦・小松悌介・岸本充・清川貴子・永井雄一郎・加藤佳端紀・古屋充子・米盛葉子・大出貴士である。また，病理部医員としては病理学教室からの栃木直文・小豆畑康や臨床各科からの医師など多数が務めたが，2005年以降は専任の病理医として高橋葉子・神戸美千代が務め現在に至っている。臨床各科の大学院生として病理部に出向した医師として河野宏彦・小林将行・中島正之・藤盛俊彦がいる。

技官は中央検査部病理室発足時は森川忠子１名であったが，以後本多加代子・斎藤信子が加わり，病理部設立と共に検査部所属の堀内文男（副技師長）・大木昌二が加わり，さらにその後滝川紀子・板倉朋恵が加わった。光学医療診療部での生検標本作成は三枝文恵が担当してきた。また，呼吸器外科出所の肺・縦隔検体の標本作成は肺癌研究施設病理部門（その後基礎病理学，診断病理学）の阿部和子が長く務めた。

千葉大学医学部附属病院病理部の特色として，1970年（昭和45年）より全国国立大学に先駆けて細胞診検査室が検査部内の独立した部門として運営されてきたことが挙げられる。初代検査部部長　降矢震，婦人科医　武田敏らが中心となり，細胞診断業務体制の基礎を築いた。この部門は病理部設立と同時に病理部と一体となり現在に至っているが，この40年間，臨床各科，特に肺癌研究施設の呼吸器外科・婦人科・外科・内科・耳鼻科・眼科等，多くの科が細胞診断に力を注いできた。その証として，日本臨床細胞学会総会・秋季大会の会長を香月秀雄を筆頭に計９名もの千葉大学医学部教授が歴任している。このような背景下，千葉県は細胞診のメッカといわれるほどになった。この間，主として呼吸器細胞診断は馬場雅行・柴光年・渋谷潔らが，婦人科細胞診は三橋暁・楯慎一らが，乳腺細胞診は長島健ら，その他の検体は何名かの病理医が担ってきた。

病理部建物は中診Ａ棟地下２階に設置され，以後，2005年～2008年にかけて医師検鏡室や解剖室などの改築・改修が行われ，現在に至っている。総面積603㎡である。標本は病理部で作成され，検鏡・診断は主に医学部の教室で行われる形が長く続いたが，二階堂孝が副部長となった2002年頃より教室員が病理部に出向き診断を行う形に移行し，さらに2004年以降，診断病理学教室の教員を中心に複数の病理医が病理部に常在する形が定着した。

卒前教育では医学部５年次生のベッドサイド教育が毎週木曜午後，６年次生対象のクリニカルクラークシップ教育が３週間を１クールとして病理部で行われている。特筆すべきは病理学教室と病理部の協力で剖検症例や外科病理症例を用いた研究を行った医学生の栗本遼太・古賀俊輔の両名が各々2006年，2008年病理学会総会学生ポスター発表で最優秀賞を獲得したことである。演題は各々「アスベスト暴露者に腹膜中皮腫が発生した一例」「Birt-Hogg-Dubé

syndrome が疑われる肺嚢胞性疾患の分子病理学的検討」であった。

卒後教育では新医師臨床研修制度が始まった2004年以降，初期研修医若干名を短期で受け入れてきたが，2010年春には病理医を目指す初の後期研修医として石畑奈津が研修を始めた。2010年以降も後期研修希望者が見込まれ，今後，病理部を窓口として病理医を目指す人材の獲得と養成が本格化することになろう。また，卒後教育の一環として光学医療診療部との消化器病理カンファランス・脳神経外科学教室との神経病理カンファランス・産婦人科学教室との婦人科病理カンファランス・小児外科との小児腫瘍カンファランスが月１回行われてきた。また院内合同CPCが病理部・総合診療部主催で2008年より年数回開催されている。

現在から未来に向けて

2000年代に入り，医学教育モデルコアカリキュラムの導入・大学法人化・新医師臨床研修制度の開始などの新たな流れの中で，附属病院病理部に求められる役割は格段に大きくなっている。すなわち，附属病院における診療・教育・研究活動のますますの拡大と高度化が予想される中，これを量・質共に十分に支える病理診断体制の整備と人材育成が喫緊の課題である。また，その基盤となる外科病理学研究の充実・発展も重要な課題である。2020年には新中央診療棟が完成し，手術室は２倍に拡張される予定であり，病理手術検体も倍増が予想される。さらに本学附属病院にとどまらず，地域や国内の医療を支えるためにも診断病理分野での人材育成と制度の整備が求められる時代となった。関係者一同が力を合わせて21世紀にふさわしい附属病院病理部の新たな礎を築いて行きたい。

謝辞：本稿をまとめるにあたって多大なご協力をいただきました堀内文男氏に深謝致します。

（なかたに　ゆきお）

堀内文男副部長退職祝賀会会場にて（2008年春）

病理部集合写真2．現在のスタッフ，細胞診鏡検室にて（2010年秋）

病理部集合写真1．病理学教室員と共に，カンファランス室にて（2010年春）